

埼玉学園大学・川口短期大学 機関リポジトリ

防衛的悲観性と賞賛獲得欲求・拒否回避欲求の関連 ： 2つの承認欲求がともに強い人の特徴について

著者	小島 弥生
雑誌名	埼玉学園大学紀要．人間学部篇
巻	11
ページ	67-74
発行年	2011-12-01
URL	http://id.nii.ac.jp/1354/00000502/



防衛的悲観性と賞賛獲得欲求・拒否回避欲求の関連

— 2つの承認欲求がともに強い人の特徴について —

The Relation of Defensive Pessimism,
Praise-seeking Need and Rejection Avoidance Need

小 島 弥 生

KOJIMA, Yayoi

賞賛獲得欲求と拒否回避欲求という2つの異なる承認欲求について、先行研究においては個々の欲求が人の認知や行動に与える影響力や認知・行動との関連の検討は行われてきたが、2つの承認欲求がともに強い人の特徴は明らかにされていない。本研究では認知的方略としての防衛的悲観性が、2つの承認欲求がともに強い人にみられる認知的方略であることを明らかにすることを試みた。大学生を対象とした調査研究から尺度得点の比較を行い、賞賛獲得欲求と拒否回避欲求のともに強い人が防衛的悲観性を有している可能性が示唆された。

問題

2つの承認欲求

自己に対する他者からの評価の重要性について、菅原（1986）は対人的目標には「肯定的評価の獲得」と「否定的な評価の回避」の2種類があることを指摘している。他者から肯定的に評価されることは、人が他者と共に生きていく中で、さまざまな心理的、物理的メリットを伴う。例えば、学校生活において多くの人から好かれる人物となれば、愉快的話題や楽しいイベントを体験できる。職場において優秀な業績をあげることができれば、高い地位や報酬の獲得に結びつく。このようなメリットがあるために、自分の存在をアピールし、良いところを他者に理解してもら

おうとする。ところが、他者に自分の存在をアピールすることは、同時に他者に自分の欠点をさらすリスクを伴うことにもなる。肯定的な評価を獲得するつもりで行動していたのに、自分の欠点を露呈してしまって、結果的に否定的な評価を得ることになっては大きなデメリットとなってしまう。そのため、否定的な評価を回避するということも、人が他者と共に生きていく中では重要な目標となり得るのである。

さらに菅原（1986）は2つの対人的目標の持ちやすさの個人差を「欲求」に置き換えて測定することを試みている。小島・太田・菅原（2003）では、この菅原（1986）の測定尺度の改良を行い、他者からの肯定的な評価の獲得を目指す「賞賛獲得欲求」と、他者から

キーワード：防衛的悲観性、賞賛獲得欲求、拒否回避欲求

Key words : defensive pessimism, praise-seeking need, rejection avoidance need

の否定的な評価の回避を目指す「拒否回避欲求」というかたちで概念化している。賞賛獲得欲求と拒否回避欲求は、他者からの自己の存在について何らかのかたち（良い存在である／悪い存在ではない）で承認を受けることを目標としている点では「承認欲求」としてまとめることが可能であるが、目標の種類が異なり、独立した関係にあると考えられる。したがって、一方の欲求のみ強い人も存在すれば、両方の欲求がともに強い人、あるいはともに弱い人も存在する。

これらの2つの欲求は、他者からの評価的フィードバックに対する感情的反応について異なる影響力をもつことが明らかになっている。小島ら（2003）では、他者から肯定的な評価的フィードバックを得ると、賞賛獲得欲求の強さが満足感と、拒否回避欲求の強さが照れの感情とそれぞれ結びつき、また、他者からの否定的な評価的フィードバックに対しては、賞賛獲得欲求の強さは怒りの感情と、拒否回避欲求の強さは恥の感情とそれぞれ結びつくことを示している。賞賛獲得欲求の強い人にとって、他者からの肯定的な評価的フィードバックは目標が達成できた証であるために満足感と結びつくと考えられ、否定的な評価的フィードバックは目標とは正反対の結果であるために（目標を達成できない自分に対してか、それとも目標とは反対の評価的フィードバックを呈する相手に対してかは不明ではあるが）怒りの感情と結びつくと思われる。一方で、拒否回避欲求の強い人にとって、他者からの肯定的な評価的フィードバックは目標外の思わぬ結果であるために、その評価的フィードバックの源となった自己の状態を自分の標準的状态とみなされることへの困惑から照れの感情に結びつくと考えられ、

否定的な評価的フィードバックは目標達成の失敗状態にあたえるために恥の感情と結びつくと思われる。

上記の研究以外にも、賞賛獲得欲求と拒否回避欲求が人のさまざまな認知や行動に異なる影響を与えることを太田・小島（2004）では指摘している。例を挙げると、馬場・菅原（2000）や浦上・小島・沢宮・坂野（2009）による瘦身願望に関する研究では、賞賛獲得欲求の強さは、他者からのよい存在として認められるためにダイエットをするという瘦身を賛美する認知と関連する一方で、拒否回避欲求は太っていることにより他者から嫌われてしまうことを避けたいという防衛的な理由でダイエットを志向することが示されている。また、職場における人事評価制度と職務満足度の関係を検討した研究（小島・太田, 2009）では、賞賛獲得欲求のみ強い人が評価的な面接を定期的実施している職場に勤務していると職務満足度が高くなることを示している。さらに、企業に勤務している人を対象に勤務先の人員削減を想定させた場合の対処方略を挙げさせた研究（太田・小島, 2004）では、賞賛獲得欲求の強さは現状打破のための転職や資格取得など、人から評価を受けることに対して積極的に対処する傾向と関連があることが示された一方で、拒否回避欲求の強さは、現状を維持するために職場内の対人関係を良好に保つことを目指すといった内向きの対処と関連することが示されている。

このように賞賛獲得欲求と拒否回避欲求がそれぞれ、人の認知や行動に影響を与えたり関連したりすることは、これまでの研究で示されている。ところが、2つの欲求をともに強くもつ人、すなわち賞賛獲得欲求と拒否回避欲求という2種類の承認欲求を両方とも強

くもつ人について、明確な特徴が示せていない。この点について本研究では、「防衛的悲観性」との関係から2つの承認欲求がともに強い人の、認知的な特徴を明らかにしていくことを試みる。

防衛的悲観性について

認知的方略としての悲観主義である「防衛的悲観性 (defensive pessimism: 対処的悲観性ともいう)」に関する研究が、近年盛んである。Norem (2001) は、悲観主義者の中に、失敗や最悪の状況を想像し、起こり得る可能性をすべて熟考することによって将来の出来事に対する努力や準備が動機づけられる認知的方略を有する者がいることを示し、彼らの認知的方略を「防衛的悲観性(対処的悲観性)」と表現している。防衛的悲観性は、特性不安の高い個人がパフォーマンスを高めるために有効な認知的方略とされ(外山・市原, 2008)、文化的に不安や悲観性が高いとされる日本において検討意義が高い概念(Hosogoshi & Kodama, 2005)であるといえる。

防衛的悲観性といわれる悲観性(真の悲観主義)との違いは、過去をポジティブに認知しているか、ネガティブに認知しているかである。防衛的悲観性は、過去の似たような状況において良いパフォーマンスを修めているとポジティブに認知しているにも関わらず、将来の出来事については低い期待を有する認知的方略である。それに対し、真の悲観主義者は過去経験をネガティブに認知するとともに将来に対する期待も低く、将来の出来事に対して高いパフォーマンスを目指す動機づけに欠けることから不適応的であると考えられる。防衛的悲観者の場合は、過去経験をポジティブに認知でき、将来に対してあらゆる事

態を想定してそれに対する対処を考えることができるがゆえに、結果として高いパフォーマンスを目指すことが動機づけられる。したがって、防衛的悲観性を有する者は、真の悲観性と同様に将来の出来事に対して不安を高くもっていたとしても、より適応的に行動できると考えられている。

また、防衛的悲観性ととともに議論される認知的方略に“方略的楽観性(Strategic Optimism)”というものがある。方略的楽観性とは、課題に対して悲観的な事態を考えないことで将来に対する不安の上昇を避け、積極的な対処行動を維持する認知的方略であり、結果として高いパフォーマンスを示すといわれている。

これらの認知的方略と2つの承認欲求との関係を考えてみると、拒否回避欲求の強い人は、将来の出来事に対して最悪の状況を含めて起こり得る可能性をすべて熟考するという防衛的悲観者と、非常に似た考え方を有する可能性が高いといえる。拒否回避欲求の強い人は、他者からの否定的な評価を回避することを対人的目標として設定しやすい。彼らにとって他者から実際に否定的な評価を得てしまうことは最悪の状況であり、その最悪の事態を避けようと動機づけられやすいのであり、この点は防衛的悲観者の方略と相通じるものがある。一方で、賞賛獲得欲求の強さは、結果的に高いパフォーマンス(とそれに付随する他者からの肯定的な評価)を求めるという点で、防衛的悲観者および方略的楽観者と類似のパフォーマンスを得られる可能性を示唆するものである。これらの特徴を鑑みると、これまでの研究において対人行動や対人意識に関する特徴が鮮明ではなかった「賞賛獲得欲求と拒否回避欲求の両方が強い人」は、その認知的方略として防衛的悲観性を有する可能性が

高いと考えられる。そして、賞賛獲得欲求のみ強い人は（最悪の状況を想定しづらいという点で）防衛的悲観性よりは方略的楽観性を有しやすいと考えられ、一方で、拒否回避欲求のみ強い人は、過去の経験をネガティブにとらえやすいとすれば防衛的悲観性よりは真の悲観性に陥る可能性が強いと考えられる。

本研究の目的

そこで本研究では、賞賛獲得欲求と拒否回避欲求の強さが、防衛的悲観性のもち方とどのように関連するのかを探索的に検討する。2つの承認欲求のもち方により調査対象者を4群（両方の欲求の得点が低い群、賞賛獲得欲求の得点のみ高い群、拒否回避欲求の得点のみ高い群、両方の欲求の得点が高い群）に分け、群ごとに防衛的悲観性のもち方を比較することが本研究の目的である。

方法

調査時期と対象者

2010年12月に東京都内の私立大学において「人格心理学」「人格心理学演習」の講義・演習を受講している大学生254人に対し、講義時間の一部を使用して調査への協力を依頼した。講義終了後に質問紙を回収したところ、237人から回収できた（回収率93.3%）。

質問紙の構成

質問紙は表紙を含めてA4用紙10枚を1組とする形で構成されていた。本研究とは別の目的で実施した研究用の調査用紙が大半を占めており、本研究で分析に用いる項目は、表紙にあった項目（性別・年齢）と後半2ページ分に記載した以下の尺度・質問項目である。

1) 賞賛獲得欲求・拒否回避欲求尺度（小島・太田・菅原, 2003）

他者からの評価に対する欲求（承認欲求）を測定するための尺度であり、各欲求9項目ずつ、全18項目からなる。「1.あてはまる」～「5.あてはまらない」の5件法で回答を求めた。なお、分析の際には評点が高いほど欲求が強いことを示すように、件法を反転させた上で単純集計を行い、各欲求得点を算出した。

2) 日本語版対処的悲観性尺度（Japanese version of the Defensive Pessimism Questionnaire: 以下、J-DPQとする。Hosogoshi & Kodama, 2005）

対処的悲観性（防衛的悲観性）を測定するために開発された尺度であり、フィラー項目2項目、過去の類似経験への認知を問う判別項目1項目、将来の経験への認知的方略を問う8項目の計11項目からなる。「1.非常にあてはまる」～「7.全くあてはまらない」の7件法で回答を求めた（分析の際には評点が高いほど対処的悲観性を用いる傾向が強くなるよう、件法を反転させた上で得点の算出を行った）。なお、将来の経験への認知的方略を問う8項目の合計得点が高いほど将来の出来事に対して対処的悲観性（防衛的悲観性）を用いる傾向が強いことを、得点が低いほど将来の出来事に対して方略的楽観性を用いる傾向が強いことを示していることになる。また判別項目も、得点が高いほど過去を悲観的にとらえ、得点が低いほど過去を楽観的にとらえる傾向を表す。

結果

基礎的分析

237人の回答のうち、分析に必要な質問項

目の回答に欠損のなかったデータは222人分であった（有効回答率93.7%。男性60人、女性157人、性別不明5人）。以下の分析ではこの222人のデータを用いた。

まず、賞賛獲得欲求得点（以下、賞賛獲得と表現する）、拒否回避欲求得点（以下、拒否回避と表現する）、J-DPQの判別項目の評点（以下、判別と表現する）、J-DPQの将来の経験への認知的方略を問う8項目の合成得点（以下、J-DPQ-8と表現する）の4変数について単純相関を算出した。

Table1に示したように、拒否回避欲求とJ-DPQ-8の間に中程度の正の相関が、賞賛獲得欲求と判別の間に中程度の負の相関が、それぞれ得られた。他者から嫌われたくない欲求が強いほど将来の経験に対する悲観的予測が強くなる可能性と、他者からほめられたい欲求が強いほど過去の経験を悲観的ではなくポジティブ認知している可能性がそれぞれ示された。なお、賞賛獲得と拒否回避の間に弱い正の相関が、判別とJ-DPQ-8の間および拒否回避と判別の間にそれぞれ弱い負の相関が得られた。賞賛獲得欲求と拒否回避欲求は独立した概念とされている（菅原, 1986；小島・太田・菅原, 2003）が先行研究においては弱い正の相関が得られる傾向にあるため、本研究の結果も先行研究の結果と同様のパターンが示されたとみなされる。判別とJ-DPQ-8の相関については、防衛的悲観者ばかりではなく真の悲観者や方略的楽観者などさまざまな認

知スタイルをとる者が混在しているため、概念的に「過去をポジティブに認知する傾向」と「将来を悲観的に予測する傾向」という、相反する内容の間に弱い負の相関が得られたものと思われる。そして、拒否回避と判別の間の相関については、他の変数を統制して偏相関係数を算出したところ-.124 (*n.s.*) となったため、相関はないものとみなすことができる。

承認欲求による防衛的悲観性の違い

次に、賞賛獲得と拒否回避を平均で高低に2分割し、他者からの評価に対する欲求によって分析対象者を4類型に分けた。すなわち、両方の欲求が低い群（両欲求低群；48人, 21.6%）、賞賛獲得のみ高い群（賞賛高群；52人, 23.4%）、拒否回避のみ高い群（拒否高群；58人, 26.1%）、両方の欲求が高い群（両欲求高群；64人, 28.8%）の4群に分けた。この4群間で、判別とJ-DPQ-8の得点に違いがあるかについて一元配置分散分析を用いて検討した。

その結果、判別については $F(3,218) = 6.69$ ($p < .01$)、J-DPQ-8については $F(3,218) = 6.70$ ($p < .01$) という値が得られ、承認欲求の類型間において判別およびJ-DPQ-8の得点に違いがあることが示された。

判別についてはFig.1に示したように、拒否高群の平均点 ($M=4.31$) が、両欲求高群の平均点 ($M=3.53$) および賞賛高群の平均

Table1 各変数の基本統計量と単純相関

	拒否回避	J-DPQ-8	判別	平均	SD
賞賛獲得	.135 *	.024	-.235 **	25.8	7.51
拒否回避		.354 **	-.147 *	31.8	7.55
J-DPQ-8			-.194 *	36.5	8.68
判別				3.7	1.39

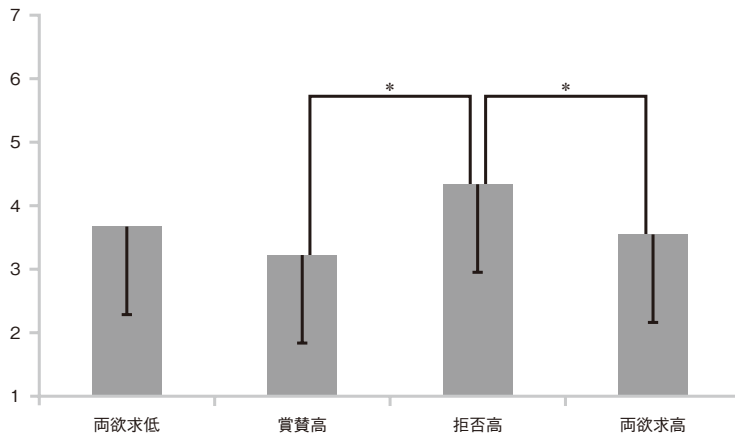


Fig.1 承認欲求の4類型別のJ-DPQ判別項目の平均値・SD

* $p < .05$

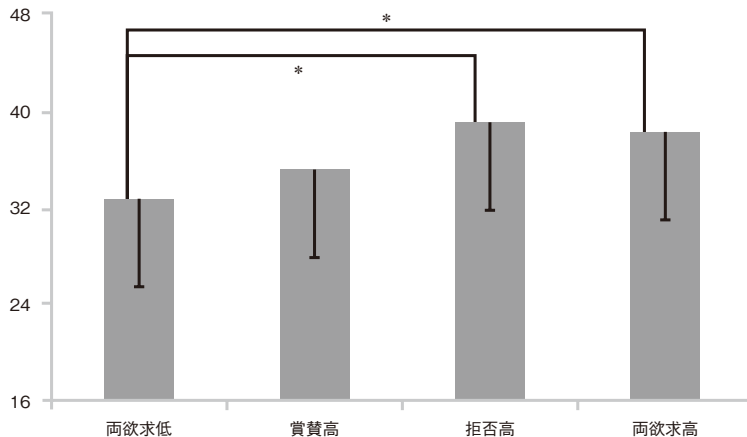


Fig.2 承認欲求の4類型別のJ-DPQ-8の平均値・SD

* $p < .05$

点 ($M=3.21$) よりも 5%水準で高くなった。つまり、拒否回避欲求のみが強く賞賛獲得欲求が弱い人は、賞賛獲得欲求が強い2つの群の人と比べ、過去の類似経験をネガティブにとらえることが示された。

J-DPQ-8についてはFig.2に示したように、両欲求低群の平均点 ($M=32.60$) が、拒否高群 ($M=38.97$) および両欲求高群 ($M=38.28$) よりも 5%水準で低くなった。つまり、拒否回避欲求が強い人は（賞賛獲得欲求の強弱に関わらず）、2つの承認欲求がともに弱い人と比べ、将来の出来事に対して防衛的悲観性の

認知の方略を取ることが示された。

以上のことから、賞賛獲得欲求と拒否回避欲求という2つの承認欲求がともに強い人が、「過去の成功体験にも関わらず、これから迎える遂行場面に対して低い期待をもつ認知の方略」である防衛的悲観性を有している可能性が示された。

考察

賞賛獲得欲求と拒否回避欲求、2つの承認欲求がともに強い人は、物事に対して防衛的

悲観性という認知的方略を用いて対処しやすい可能性が示された。

まず、判別項目についての分析結果から次のことがいえる。過去の経験について、拒否回避欲求のみ強い群ではネガティブに認知する傾向にあった。それに対し、拒否回避欲求と賞賛獲得欲求の両方が強い群では相対的に過去経験をポジティブに認知する傾向にあった。ここから、賞賛獲得欲求の強さが過去経験をポジティブに認知しやすい傾向と関連する可能性が考えられる。次に、J-DPQ-8についての分析結果、すなわち将来の類似の出来事に対してどのような認知的方略をとるかに関しては次のことがいえる。拒否回避欲求のみ強い群と、拒否回避欲求と賞賛獲得欲求の両方が強い群の2群において、両方の欲求がともに弱い群と比べると、防衛的悲観性の得点が高くなった。ここからは、拒否回避欲求の強さが防衛的悲観性の認知方略と関連する可能性とともに、2つの承認欲求の両方が弱い人は方略的楽観性の認知的方略を有している可能性も示唆される。

防衛的悲観性の定義にしたがえば、拒否回避欲求のみ強い人の認知的方略は必ずしも防衛的悲観性に該当しないであろう。防衛的悲観性を有する者は、過去経験をポジティブに認知しているにも関わらず、将来の出来事に対して悲観的に想定するがゆえに、さまざまな可能性を熟考することで将来の出来事に立ち向かおうとする。ところが、拒否回避欲求のみ強い人々は過去経験をネガティブに捉える傾向を有しており、この点は先行研究(e.g. 太田・小島, 2004)でも示されている点である。拒否回避欲求のみ強い人は、対人的目標の設定が「否定的な評価を回避すること」にあり、他者からの肯定的な評価というポジ

ティブな側面についてはそもそも発想がしにくいという特徴がある。拒否回避欲求のみ強い人は、過去の経験についても、将来の出来事についても、他者からの否定的な評価の有無（および、その拡張的な認知である否定的な側面の有無）という観点で認知しやすいと考えられる。

それに対して、拒否回避欲求とともに賞賛獲得欲求も強い人は、ある意味「状況によって取る視点を変え得る人々」とみなすことができるのではないか。過去の経験については賞賛獲得欲求の強さを背景とする肯定的な側面の有無で物事をとらえる傾向が発揮されて、ポジティブな側面を中心に認知しつつ、将来の出来事についての予測においては、拒否回避欲求の強さを背景とする否定的な側面の有無で物事をとらえる傾向が働き、悲観的な結果を予測しつつ、それを回避するためにあらゆる可能性を考えて立ち向かう。2つの承認欲求がともに強い人は、認知する出来事の種類（過去経験、将来の出来事）によって、ポジティブな側面の有無という観点と、ネガティブな側面の有無という観点を、切り替えて物事を認知している可能性が考えられる。

なお、賞賛獲得欲求と拒否回避欲求の両方が弱い人々については、4つの群の中でもっともJ-DPQ-8の平均得点が低かったことから、少なくとも、将来の出来事に対しては悲観的ではなく楽観的にとらえやすい人々であるといえる。2つの承認欲求がともに弱いということは、端的に言えば、他者の評価を気にしない人ということになる。他者からのどのような評価が得られ、それによって自分の集団内での立ち位置がどのように有利・不利になるかといった観点をもたないと思われる。彼らは自分自身の基準でのみ物事をとらえやす

いと考えられ、そうであるとするならば、いわゆる自己中心性（自分の視点で物事をとらえる傾向）が発揮されやすく、自分にまつわる事柄を肯定的、楽観的にとらえる傾向が強くなると思われる。

今後の検討課題として、防衛的悲観性を測定する別の尺度と2つの承認欲求との関連を検討することが挙げられる。J-DPQは過去経験を1つの判別項目でのみ測定しているため、承認欲求の類型別に防衛的悲観性（をはじめとする認知的方略のもちやすさ）を比較するのに適した尺度とはいえない。過去経験の認知と将来の出来事への予測の両方の側面について、複数の項目を用いた測定ができる尺度を用いることで、賞賛獲得欲求と拒否回避欲求の両方がともに強い人々が防衛的悲観性という認知スタイルをとりやすい人々であるかを確認することができるだろう。

引用文献

- 馬場安希・菅原健介 2000 女子青年における瘦身願望についての研究. 教育心理学研究, 48, 267-274.
- Hosogoshi, H. and Kodama, M. 2005 Examination of defensive pessimism in Japanese college students: Reliability and validity of the Japanese version of the Defensive Pessimism Questionnaire. *Japanese Health Psychology*, 12, 27-40.
- 小島弥生・太田恵子 2009 企業従業員の職務満足度と人事評価システムの捉え方との関連. 産業・組織心理学研究, 23, 75-86.
- 小島弥生・太田恵子・菅原健介 2003 賞賛獲得欲求・拒否回避欲求尺度作成の試み. 性格心理学研究, 11, 86-98.
- Norem, J. K. 2001 Defensive pessimism, optimism, and pessimism. In E. C. Chang (Ed.) *Optimism*

and Pessimism: Implications for Theory, Research, and Practice. Washington D. C. American Psychological Association Press. pp.77-100.

- 太田恵子・小島弥生 2004 第6章 職場での評価をどう意識するか. 菅原健介（編著）ひとの目に映る自己－「印象管理」の心理学入門. 金子書房, pp.153-180.
- 外山美樹・市原学 2008 中学生の学業成績の向上におけるテスト対処方略と学業コンピテンスの影響：認知的方略の違いの観点から. 教育心理学研究, 56, 72-80.
- 菅原健介 1986 賞賛されたい欲求と拒否されたくない欲求－公的自意識の強い人に見られる2つの欲求について. 心理学研究, 57, 134-140.
- 浦上涼子・小島弥生・沢宮容子・坂野雄二 2009 男子青年における瘦身願望についての研究. 教育心理学研究, 57, 263-273.

付記

本研究は、2011年9月2日～4日に開催された「日本感情心理学会第19回大会・日本パーソナリティ心理学会第20回大会 合同大会」（於：京都精華女子大学）で発表した内容を再分析・再構成したものである。